

かたりべ 90

豊島区立郷土資料館だより



雑司が谷駅周辺の景観もかわりつつある



▲転落防護柵が備えられた雑司が谷駅ホーム

▲副都心線で運行される10000系車両

ヨッ、待ってました！地下鉄副都心線開通せり！！

去る六月一四日、東京地下鉄（東京メトロ）副都心線が開通しました。この路線は、和光市駅（埼玉県和光市）から渋谷駅（渋谷区）二〇・二キロメートルを全一六駅で結ぶもので、池袋・新宿・渋谷の三大副都心をつなぐところから「副都心線」と名付けられました。すでに小竹向原駅で西武有楽町線・池袋線と、また和光市駅で東武東上線と相互直通運転が実施されており、二〇一二年度には、渋谷駅から東京急行電鉄東横線・横浜高速鉄道みなとみらい線への相互直通運転の実施も決定しています。これにより、近い将来埼玉県南西部方面から副都心を経由して横浜方面に至る広域的な路線が完成することになります。なお、现阶段で副都心線開通後の東京地下鉄による新規路線構想はなく、副都心線が事実上の東京地下鉄最後の新規開業路線となりそうです。

さて、豊島区内の駅は、千川・要町・池袋（かつての「新線池袋」）、雑司が谷の四駅ですが、これらのうち、純粹に新規開業するのは雑司が谷駅ひと駅になります。雑司が谷駅周辺には、鬼子母神堂・旧宣教師館・雑司ヶ谷霊園といった名所・旧跡が点在し、観光シーズンの休日には、まち歩きや史跡めぐりを楽しむ人たちが賑わいます。ことに鬼子母神堂周辺は、豊島区内で唯一江戸時代の面影を今に伝える地域として知られており、多くの人が見込まれています。

その一方で、駅周辺では数年前から様々な整備事業が急ピッチで進められています。また、東池袋の六つ又陸橋から千登世橋までの明治通りバイパス工事もあわせて行われており、ここ数年で雑司が谷駅周辺の道路状況、町並み、自然環境は一変しそうです。副都心線の開通によって、果たして人の流れは変わるのか？ 人々の居住環境がどう変わり、行動エリアに変化が生ずるのか？ これから先も興味深く見守っていききたいと思います。

（秋山）

産婦を助ける産婆さん

—若林ミヨさん・雑司が谷—

現在、出産するのは産院で、ということがほとんどです。なかには、産婦の精神的な支えにもなる「お産婆さん」を頼りにする人もいます。しかし、出産は自宅で行い、お産婆さん（助産婦の旧称）



「さんば若林」の看板と千恵子さん 昭和初年撮影

が赤ん坊をとりあげることがふつうだった時代がありました。

さて、ここでは、雑司が谷に住んでいたお産婆さんの若林ミヨさん（明治二十一年―昭和五一年）の日常の一端を、ミヨさんの実の娘さんの白根千恵子さん（大正一一年生まれ）からおうかがいしたので紹介します。

■産婆の家庭と内弟子

ミヨさんの父親は植木職人、兄弟姉妹は十一人で、ミヨさんは六番目でした。千恵子さんには弟がひとりいました。千



右矢印は「さんば若林」。東京府下高田町明細図（大正15年）複製より。地図上方は雑司ヶ谷霊園に続く。

恵子さんが小学生の頃、家族

の他に、将来産婆として独立したいという希望をもつ内弟子が七、八人いました。近所に住む通いの既婚女性をはじめ、遠く鶴岡（山形県）や茨

城県からきた未婚の女性もいました。当時、ミヨさんの内弟子のなかには、佐久間産婆学校（三崎町）と水原産婆学校（俳人水原秋桜子経営・千代田区神田所在）へ、産婆の資格取得のため夜学に通う人がいました。また、お産がかち合った時、ミヨさんの代わりを頼むことができるようになった内弟子もいました。母親は忙しいため、千恵子さんの家庭でのしつけ、朝御飯や学校のお弁当作りは、内弟子が行っていました。

■だんだん近くなる下駄の音

お産の時間は決められません。夜中でも明け方でも、ミヨさんは産婦の所へ出向きました。電話はなく、ほとんどの場合、産婦の夫が走って迎えにきます。寝ていると、下駄の音がだんだん近くなり、「こんばんわ！若林さん！ん！」と言う声と玄関をドンドンと叩く音。音は、向か



千恵子さんの初節句。段飾りの下方にさまざまな大きさの犬張子。犬張子は子どもの初宮参りの祝いの玩具。大正12年（推定）撮影。

いこの家の板扉に反響して大きな音になりました。すると、母親は、黒シユスの風呂敷で包んだお産道具を持って出掛けるのでした。母親がいない時、千恵子さんは幼い弟を一晚中あやさなければなりません。そんなとき、こんな商売はいやだなと思ったこともあったそうです。

千恵子さんは、女学校入学前頃から母親の仕事であるお産で使用したシートやおむつの洗濯をしたり、産家の事情でおむつをそろえることができない人のため

に、古い浴衣をほどいておむつを縫い
ました。母親が多忙なため親子水入らずの
時は持てませんでした。「産婆さんは妊
婦と一緒に産んでくれた」と誰からもい
われていた感謝の言葉を、千恵子さんは
思い出します。

■命と向かい合う

産婆の出産手数料は、産婆会で規定が
あったようでした。お七夜（出産後七日
目のお祝い）に、産婆さんは、熨斗袋に
お礼が入ったものを受けました。その他
に、賢節一本、重箱に赤飯（または米一
升）、するめ二枚がありました。するめが
ない家もありました。重箱は、産婦の家
のもので、空いた重箱を返すとき
には、「おうつり」といい、その重箱の
なかにマッチの小箱を入れたものでした。

これには、「火をつなぐ」
という意味があったとい
うことで、世代が変わっ
た今でも、つきあいをし
ている家があります。

ミヨさんは、遠くは西
新井（足立区）方面へ、
王子電車（現在の都電）
でよく行きました。区内
高田南町（当時）のお産
では、夜中に自転車でミ
ヨさんを迎えにきたこと
があったそうで、自宅が
ある雑司が谷への帰り道
は上り坂になります。疲
れた身体は、「きつねに背
中に乗られ前かがみにな



上：自宅の庭には八塚弁財天を祀っていた。
ミヨさんとそのふたりの子ども。
昭和12年1月7日撮影。

右：胞衣処理の領収書。縦13cm、
横18cm。大正11年10月28日午前
零時30分に誕生した千恵子さん
に関するものかもしれない。



った」とか「お月様が段をつけて上がっ
ていった」とか「たぬきが丸いもの（月
？）を挙げていた」というような不思議
な経緯をしたそうです。
逆子や難産のときには早川医院（目
白）という産婦人科と提携し、常に妊婦
のことで行き来していました。
数多い出産のなかでは、残念な結果が

事前にわかることもあり、そのようなと
き、妊婦やその家族には何と言ってよい
か、ミヨさんは悩んでいたようです。

ところで、出産の後産を胞衣とい
取扱の作法があり、屋敷の隅や軒下等に
埋めるといふ習慣は全国的ありました。

千恵子さんは、素焼きの焙烙のような皿
状のものを上と下にし、その中に入れた
といひます。上記領収書は、胞衣専門業
者による回収を意味するものです。

■心よりどころと人の記憶に

ミヨさんは、大正元年九月に産婆学説
試験に合格し、続いて十一月に東京府よ
り産婆試験合格之証を受けました。昭和
二七年には、保健婦助産婦看護婦法によ
り助産婦の免許を得ています。産婆とし
て何歳まで現役であったか定かではあり
ませんが、いつしか、「お礼をしなくても
とりあげてくれる」という評判もたつた
ようです。昭和三〇年代に自分の息子を
とりあげてもらったという方はいます。

筆者は、平成一八年五月、目白・雑司
が谷の方々七〇名程の前で地域の歴史を
話す機会を得ました。ご高齢の方が多い
講演会でしたが、若林ミヨさんの名前は
三人の方が知っておられ、一人の方は、
「私はとりあげてもらいました」と手を
真っ直ぐ挙げられました。

（福岡）

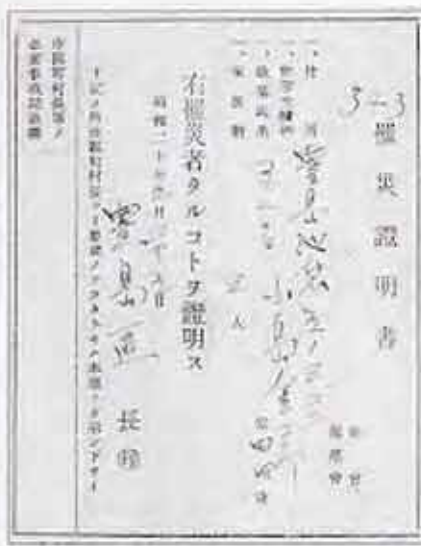
空襲で焼け出された人の頼みの綱

「罹災証明書」にいろいろなものがあるのは？

Q 戦時生活についての郷土資料館の展

示や図録に、米軍の空襲で家を焼かれた人たちに発行された「罹災証明書」がとり上げられています。それを見ると証明書は、書き方が様々で、発行者名もいろいろのようです。どんな決まりになっていたのですか。(匿名希望・二〇代女性)

A おっしゃるとおり、罹災証明書は、区長名のもの、町会長名のものなどあり、



罹災証明書、右：区長名、左：町会長名(小島吉一氏寄贈)。

ている罹災証明書をみると、交付者がそれぞれ発行者となっているようにみえます。大空襲により発行を容易に

罹災証明書はもともと、空襲罹災者が移転先でも、食糧配給を円滑に継続できるようにに米・味噌などの購入券とあわせて発行されるものでした。

一九四四(昭和一九)年二月二日夕刊の「読売報知」紙は、「空襲下、食糧万全の備へ」という見出しで、この購入券つき罹災証明書について紹介し、ちかく「警視庁管下の隣組長と交番」に配布され、「所轄の交番または隣組長から交付される」としています。

前にあげた通牒は、三月一〇日の大空襲を機に制度を拡大したものです。三月一〇日未明の、大人口密集地である東京下町地区を中心としたアメリカ軍の無差別空襲は、一夜にして死者二〇万人以上、焼失戸数一七万以上という被害を出しました。この想定をはるかにこえた事態にあつて、対策を迫られたのです。

大量の罹災者・移転者を前に、罹災証明書の発行も、もっと容易にすることが必要でした。通牒では、罹災証明書を持たないものも「災害直後数日間」は鉄道輸送や受入地での配給について便宜を与

えられるとしています。東京からの離脱が第一で、罹災証明書の発行はそれからでもよい。このことが避難先での証明書の交付も可ということになったものと思われます。用紙や様式の問題にはふれられていませんが、同様に、運用の容易化という点から、様々なものが使われるようになったのでしよう。

続く空襲で

しかし、空襲はさらに続きました。豊島区など東京西北部を襲った四月一三―一四日空襲の後、一四日、東京都民生局長が出した通牒は、「昨夜半の敵機空襲に依る災害の実状に鑑み当分の間」罹災証明書は「交付せざることに」内務省と協議して決めたといひます(同前、四九二頁)。それでは罹災者・避難者の援助はどうするのか。罹災者がみずから、申告すれば、罹災者として鉄道切符や配給が受けられるとしています。

ところが、私たちは今日、四月一四日以後の日付の罹災証明書を見ることがあります。形式的にはいらなくとも、実際には、やはり、証明書があつたほうが便宜を多く受けられたのでしようか。それにしても、罹災証明があれば、果たして本当に配給や購入はできたのでしようか。(戦後の生まれ・六〇代男性)

豊島区池袋本町二丁目の重林寺（創建は慶安三年・一六五〇以前）には、現在二つの梵鐘があります。一つは、鐘堂に懸かっている昭和三五年（一九六〇）製造の梵鐘（高さ二三五cm）で、除夜の鐘として親しまれています（写真①）。

古田治雄ご住職（第一九世）によれば、寛政七年（一七九五）製造の梵鐘が、第二次世界大戦中に供出されたため、一〇数年間梵鐘がなかったのですが、昭和三〇年代初めに禅昌寺（あきる野市）にあることが確認され、新しい梵鐘と交換することにになりました。しかし梵鐘には亀裂が生じていて、音色も良くなかったため引取りを断念し、先代住職により新たに梵鐘が铸造されました。梵鐘の内側に



写真① 昭和35年（1960）銘の梵鐘

は、寛政七年の梵鐘の銘文が書き写され、再铸造起人一五名と地元四町会の名前が刻まれています。重林寺の檀家と地元住民が、供出された梵鐘に対していかに愛着を抱いていたかがよくわかります。

その梵鐘が、平成一七年（二〇〇五）六月、古田ご住職の尽力により、六〇数年ぶりに里帰りしました。現在観音堂前に安置されています（写真②）。伊藤宏之氏（台東区文化財保護調査員）らと調査した結果、梵鐘は寛政七年（一七九五）二月第九世快音により、第八世快典の三十三回忌追善のために改铸されたものであることがわかりました。高さ一一六・三cm、口径六二・六cmの青銅製で、合計一〇八個の乳があり、龍頭（釣手）などの細部は丁寧な造りで、下帯には唐草文様をめぐらし、意匠的にも優れています。

梵鐘には「武蔵国豊嶋郡池袋村重林寺鐘銘並序」と題し、铸造の理由と、当時重林寺の本寺であった愛宕前眞福寺第二七世英範の撰による銘文が刻まれています。それによれば、「古鐘」

が小さく音色も良くないため、第九世快音が広く縁者を募って「改铸」したとあり、「新編武蔵風土記稿」（文政一一年・一八二八）の池袋村・重林寺の項にある「鐘楼」の記述とも一致します。

続いて梵鐘には仏法の功德が記され、「世話発頭人山口藤右

エ門」と世話人二三名（石川庄兵衛、石川清三郎、石川傳左エ門、山口倉右エ門、田中常右エ門、田中織右エ門、木口長左エ門、荒井三右エ門、深野茂左エ門、江河権之丞、江河彦右エ門、西山利兵衛、西山五兵衛）のほか、「当村本講中都合百五人」とあり、梵鐘の改铸に際して、重林寺の檀家や講中の池袋村民が多数協力したことがわかります。

第九世快音は、鐘堂、庫裏、観音堂、七面観音塔の建立や、仏像・仏具類の製作など、重林寺の整備・拡充を行なった中興の祖とされており、梵鐘の改铸もその一環であったと考えられます。この梵鐘の製作者は神田の鋳物師・五代目西村和泉守藤原政平です。西村家は



写真② 寛政7年（1795）銘の梵鐘

延宝八年（一六八〇）から大正時代まで一二代にわたって活躍した著名な鋳物師で、代々藤原政時を名乗り、幕府の御用鋳物師として仏像、仏塔、密教法具など多くの作品を手がけました。五代目は政平と称し、寛政一〇年（一七九八）に没しています。都内に現存する梵鐘のなかで政平の銘があるものは少なく貴重です。また区内で近世の梵鐘を有している寺院は、法明寺（享保一七年銘）と本妙寺（天保二年銘）が確認されていますが、多くは戦時中に供出されたものと思われる。このことから重林寺の梵鐘は寺院の歴史と池袋村との関わりを示す重要な地域資料として、平成一九年一月豊島区有形文化財に登録されました。（横山）

2008年度郷土資料館事業予定（2008年4月～2009年3月）

展示	春の収蔵資料展 内容：花見の名所、長屋門にあったもの、豊島区と都電、学童疎開ほか	4月1日～6月25日
	夏の収蔵資料展&第3回新池袋モンパルナス西口まちかど回遊美術館 内容：アトリエ村に住んでいた画家たちの風景画、空襲直後のスケッチ、当時の風景写真ほか	7月9日～10月5日
	企画展「一粒入魂！～日本の農業をささえた種子屋」（仮称） 内容：中山道沿いに多く存在した野菜の種子問屋の寄贈資料を中心に、東京の野菜栽培と種苗業の歴史を紹介します。	10月16日～12月14日
	冬の収蔵資料展 内容：豊島のものづくり、組紐ほか	2009年1月6日～1月下旬 2月下旬～3月31日
協力事業展示	「明治女学校100年」（仮称）	2009年1月下旬～2月下旬
講座・見学会	地域史講座・フィールドワーク「種子屋通り」を歩く（全2回）	10月23日、30日
	歴史講座「OH!江戸でござる パート2」（全5回）	11月1日、8日、15日、22日、29日
	企画展 展示説明会（6回）	11月1日・2日・29日・30日、 12月13日・14日
刊行物	郷土資料館だより「かたりべ」90号～93号	年4回発行、2000部、無料頒布
	企画展図録「一粒入魂！」（仮称）	10月刊行予定
	豊島区地域地図第7集「巣鴨村・池袋村絵図」	2009年2月刊行予定
	研究紀要「生活と文化」第18号 付・2008年度年報	2009年2月刊行予定
臨時休館	燻蒸および展示替えに伴う休館	6月26日～7月8日
	展示替えに伴う休館	10月6日～10月15日
	展示替えに伴う休館	12月15日～12月23日
	年末年始の休館	12月28日～1月5日

※都合により事業内容や日程が変更する場合があります。

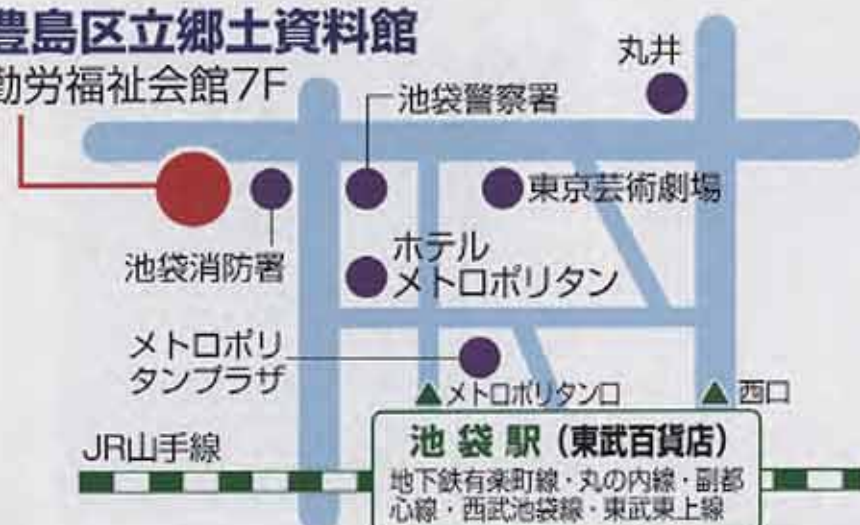
※詳細は「広報としま」または当館のホームページで随時お知らせします。

利用案内

- 開館時間 午前9時から午後4時30分まで
- 休館日 毎週月曜日、第3日曜日、祝日、年末年始
- 入館料 無料
- 所在地 〒171-0021 東京都豊島区西池袋2-37-4 勤労福祉会館7階
- 電話 03-3980-2351
- URL: <http://www.museum.toshima.lg.jp>
- 交通 JR山手線、地下鉄有楽町線・丸の内線・副都心線、西武池袋線、東武東上線「池袋駅」西口徒歩10分、メトロポリタン口徒歩8分

豊島区立郷土資料館

勤労福祉会館7F



編集後記

かたりべ90号をお届けします。

地下鉄副都心線の開通にあわせて、タウン誌などが沿線の見どころやイベント情報の特集を組んでいます。

郷土資料館（池袋駅）と旧宣教師館（雑司が谷駅）も取材が多くなり、地下鉄の開通によって両館の距離も縮まりました。これを機会に新たな利用者呼び込みのため、より一層PRに努めたいと思います。（よこ）

かたりべ No.90

2008年6月25日発行

豊島区立郷土資料館